

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成 2 6 年 3 月 1 3 日

農林水産省

北 海 道

1 品種構成の動向

「きらら397」、「ほしのゆめ」等が減少し、「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

収量・品質の安定に向け、育苗管理の徹底、防風対策等の栽培環境整備、適正な施肥等の指導が行われている。

なお、中苗移植に代わり成苗移植を行う面積割合が増加している。

3 気象と収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、千もみ当たり収量はやや上昇傾向となっている。

なお、近年は、登熟後期の平均気温が上昇傾向となっている。

<最近の作柄（平成19年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
19	○	×	—	98
20	◎	—	◎	106
21	○	××	××	89
22	××	◎	×	98
23	××	◎	○	105
24	○	—	◎	107
25	×	◎	○	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等の作付面積割合が増加していることに加え、成苗移植等高収量で安定的に生産する栽培技術が普及していることから収量水準は上昇傾向にある。

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H21	22	23	24	25	26 (見込)
ななつぼし	569	36.9	38.4	38.6	40.8	41.2	44.2
きらら397	577	29.8	28.2	27.4	25.2	22.1	21.4
ゆめぴりか	561	2.6	4.8	8.7	9.7	11.6	11.7
ほしのゆめ	547	12.2	9.8	7.6	6.5	4.6	3.7
おぼろづき	531	6.1	5.1	3.8	4.8	4.8	3.8
ふっくりんこ	560	3.9	4.3	4.7	5.7	6.0	7.3
*はくちょうもち	509	4.6	3.6	2.8	2.5	2.5	2.0
*きたゆきもち	544	0.1	0.4	1.3	1.6	1.7	1.6
単収試算値の対前年差(kg)			1.1	0.9	-0.3	-0.1	0.8

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である（以下同じ。）。
 2. 平成26年産見込は農業団体等の情報から推計した（以下同じ。）。

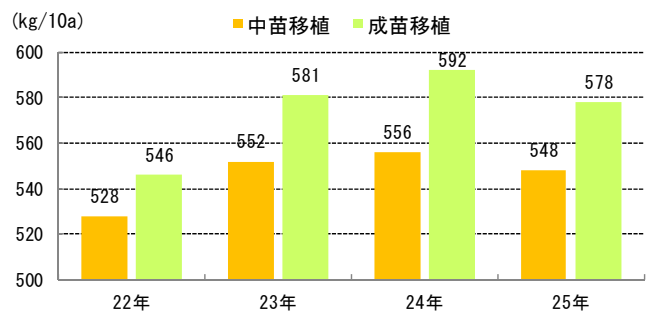
<栽培技術等の動向>

移植方法別作付面積割合の動向

移植方法	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)		
		H22	23	24
中苗移植	546	32.4	31.1	29.1
成苗移植	574	65.6	67.0	68.5
単収試算値の対前年差(kg)			0.4	0.5

※ 作付面積割合は北海道農政部「米に関する資料」より作成した。

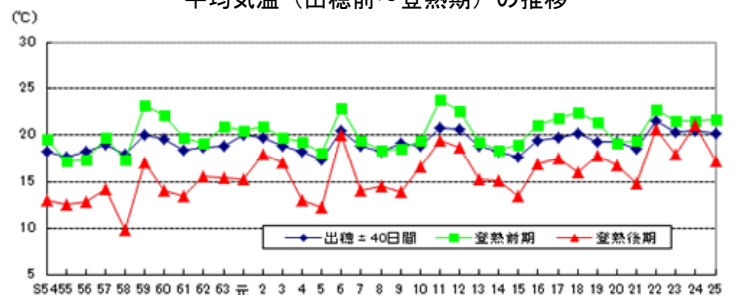
移植方法別10a当たり玄米重



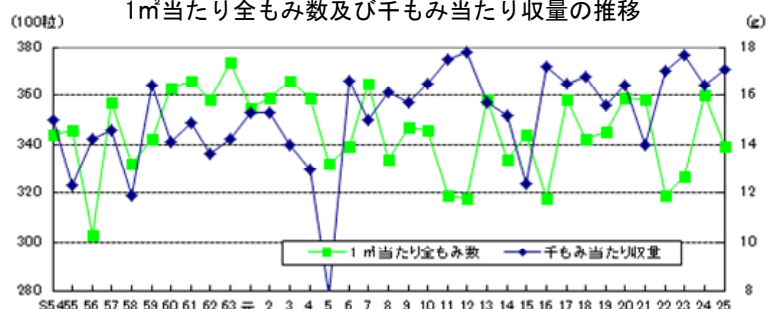
※ 水稻作況調査結果より作成した。

<平均気温、もみ数及び登熟の推移>

平均気温（出穂前～登熟期）の推移



1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



千葉県

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」、「ふさおとめ」及び「ふさこがね」を中心とした品種構成であるが、近年、収量水準の高い「ふさこがね」が増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

良食味・高品質米の生産に向け、土作りの推進、適正な施肥、早期落水防止等水管理の徹底、適期収穫、適正な乾燥・調製の徹底等の指導が行われている。

なお、登熟の向上のため落水を遅らせる傾向がみられる。

3 収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

<最近の作柄（平成19年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指数）
19	×	○	×	98
20	○	○	○	105
21	×	—	—	99
22	×	○	○	102
23	—	○	—	100
24	○	—	○	104
25	○	—	○	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「ふさこがね」の作付面積割合が増加していることに加え、落水期を遅らせることによる登熟への影響により、収量水準は上昇傾向にある。

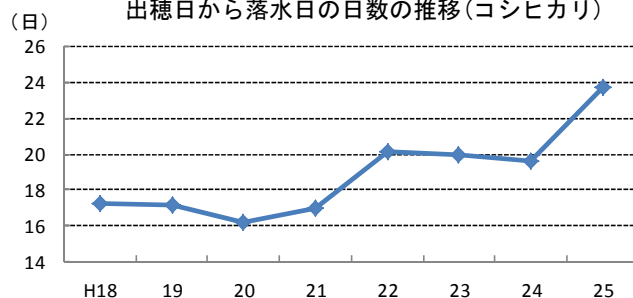
<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H21	22	23	24	25	26 (見込)
コシヒカリ	539	66.9	68.7	66.7	66.7	66.5	65.9
ふさおとめ	568	11.0	10.0	10.9	10.5	10.3	10.5
ふさこがね	603	12.5	11.4	13.3	13.2	13.9	14.5
あきたこまち	555	5.4	5.4	4.3	4.6	3.7	3.7
単収試算値の対前年差(kg)		-1.0	1.4	-0.1	0.3	0.4	

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である（以下同じ。）。
 2. 平成26年産見込は関係機関の情報から推計した（以下同じ。）。

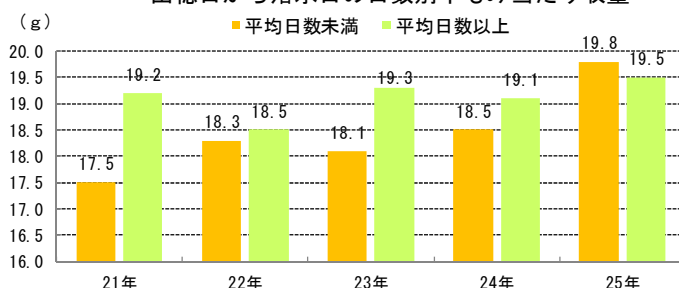
<栽培技術等の動向>

出穂日から落水日の日数の推移(コシヒカリ)



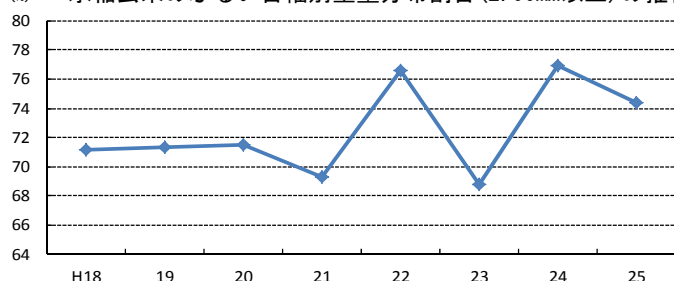
※ 水稻作況調査結果より作成した(以下同じ。)

出穂日から落水日の日数別千もみ当たり収量

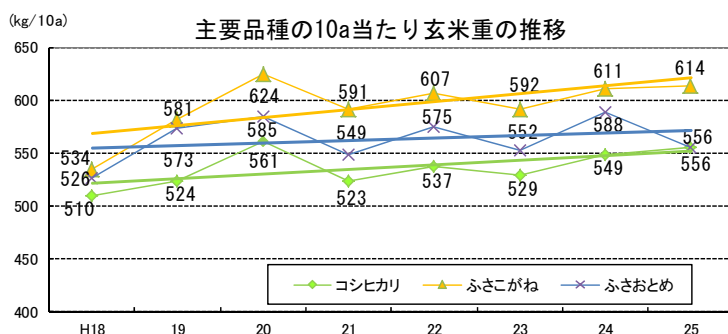
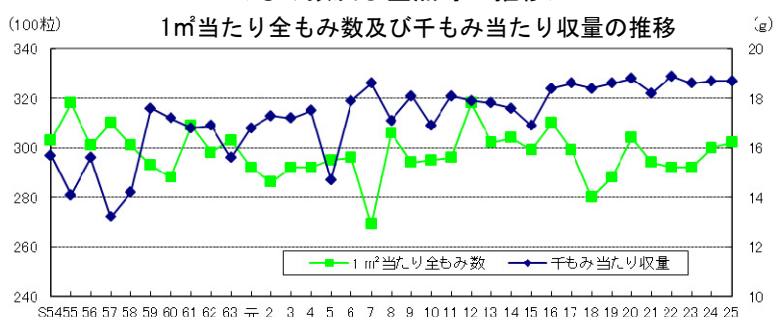


※ 平均日数とは各年次の出穂日から落水日の日数の平均値である。

水稻玄米のふるい目幅別重量分布割合(2.00mm以上)の推移



<もみ数及び登熟等の推移>



新潟県

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」及び「こしいぶき」を中心とした品種構成であるが、近年、「コシヒカリ」に比べ収量水準の高い「こしいぶき」及び「ゆきん子舞」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

良食味・高品質米の生産に向け、適正生育量の確保と過剰生育の防止、適正な穂肥と水管理等の指導が行われている。

なお、減農薬・減化学肥料栽培等の特別栽培米の作付面積割合が増加していたが、近年鈍化傾向にある。

3 気象と収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、近年、もみ数、登熟（千もみ当たり収量）ともに安定している。

なお、近年は、登熟期間の平均気温が横ばいとなっている。

<最近の作柄（平成19年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
19	○	×	—	100
20	○	○	○	102
21	—	—	—	99
22	×	—	×	97
23	○	×	—	100
24	○	—	◎	104
25	○	—	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「こしいぶき」及び「ゆきん子舞」の作付面積割合が増加していることから収量水準は上昇傾向にある。

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H17	19	21	23	25	26 (見込)
コシヒカリ	549	81.7	79.0	76.9	71.0	71.0	71.0
こしいぶき	603	7.5	9.1	13.6	17.3	17.5	19.0
ゆきの精	585	1.8	1.4	0.5	0.5	0.5	0.4
ひとめぼれ	589	1.4	0.9	0.4	0.4	0.3	0.2
五百万石	560	1.6	2.1	2.0	1.9	2.0	2.1
こがねもち	555	2.5	2.6	2.6	3.2	3.0	2.6
ゆきん子舞	637			1.2	1.8	2.5	2.4
単収試算値の対前年差(kg)			0.7	2.9	2.7	0.7	0.5

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である（以下同じ。）。
 2. 平成26年産見込は県、農業団体等の情報から推計した（以下同じ。）。

<地域別作付面積割合の動向>

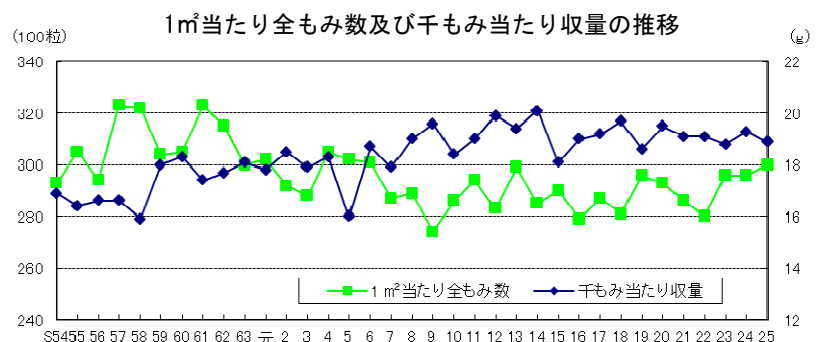
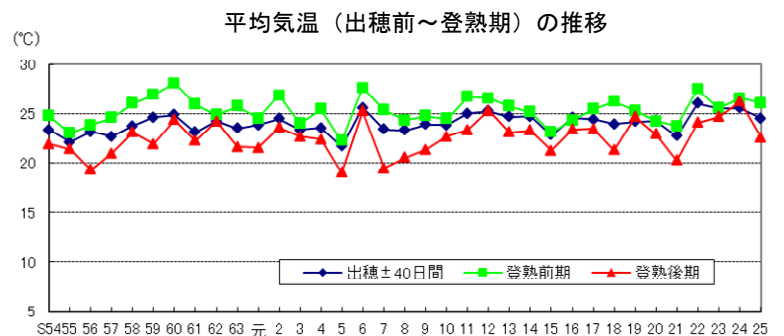
地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H17	19	21	23	25	26 (見込)
岩船	540	5.2	5.3	5.3	5.4	5.3	5.4
下越北	552	14.1	13.8	14.0	14.2	14.4	14.5
下越南	568	28.1	28.4	28.2	28.6	28.6	28.7
中越	538	21.3	21.3	21.1	21.2	21.4	21.5
魚沼	520	13.0	13.1	13.5	13.1	12.8	12.6
上越	514	12.8	12.6	12.6	12.4	12.3	12.2
佐渡	532	5.5	5.5	5.3	5.1	5.2	5.1
単収試算値の対前年差(kg)			0.0	0.0	0.2	0.1	0.1

<特別栽培米等作付面積割合の動向>

特別栽培米等名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H17	19	21	23	25	26 (見込)
直播栽培	464	1.4	0.9	1.0	1.0	1.2	1.2
有機栽培	447	0.5	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3
減農薬・減化学肥料栽培	490	3.5	10.6	19.9	17.2	17.5	17.0
特別栽培米以外	539	94.6	88.2	78.7	81.4	81.0	81.5
単収試算値の対前年差(kg)			-2.9	-4.7	1.3	-0.3	0.3

※ 10a当たり収量水準は農業団体等の情報から推計した。

<平均気温、もみ数及び登熟の推移>



福 井 県

<品種別作付面積割合の動向>

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」及び「ハナエチゼン」を中心とした品種構成であるが、近年、収量水準の高い「あきさかり」が増加する傾向にある。

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	20	22	24	25	26 (見込)
コシヒカリ	507	69.7	64.3	59.3	59.8	57.8	56.5
ハナエチゼン	539	20.8	24.4	25.4	24.7	24.5	23.0
イクヒカリ	549	1.6	4.3	6.7	2.5	1.7	1.0
あきさかり	583			1.0	7.2	10.3	13.0
単収試算値の対前年差(kg)			2.3	2.4	2.6	2.1	1.5

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である(以下同じ。)
2. 平成26年産見込は県、農業団体等の情報から推計した(以下同じ。)

2 栽培技術等の動向

土づくりと適切な水管理の徹底、高温登熟回避による品質向上のための適期移植等の指導が行われている。

なお、減農薬・減化学肥料栽培等の特別栽培米の作付面積割合が近年、以前の増加に比べ鈍化傾向にある。

<地域別作付面積割合の動向>

地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	20	22	24	25	26 (見込)
嶺北	525	84.7	84.6	84.4	84.5	84.4	84.4
嶺南	488	15.3	15.4	15.6	15.5	15.6	15.6
単収試算値の対前年差(kg)			0.0	-0.1	0.0	-0.1	0.0

3 気象と収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、近年、もみ数、登熟(千もみ当たり収量)ともに安定している。

なお、近年は、登熟期間の平均気温が横ばいとなっている。

<特別栽培米等作付面積割合の動向>

特別栽培米等名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	20	22	24	25	26 (見込)
福井県特別栽培農産物	460	1.1	2.3	3.2	4.9	6.0	7.1
直播栽培	487	8.9	11.6	13.1	12.4	12.5	12.5
特別栽培米以外	529	90.0	86.1	83.7	82.7	81.5	80.4
単収試算値の対前年差(kg)			-2.0	-1.3	-0.9	-0.8	-0.7

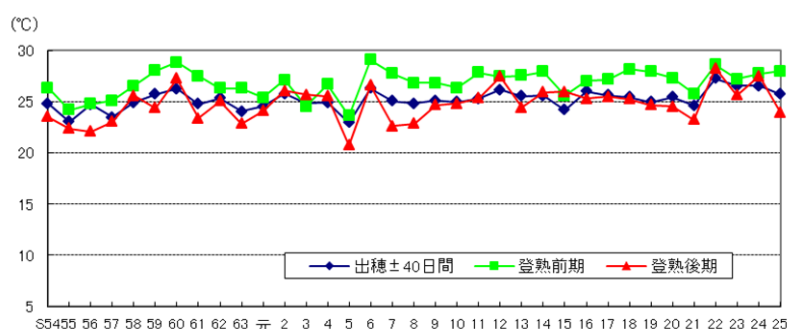
<平均気温、もみ数及び登熟の推移>

<最近の作柄(平成19年産以降)>

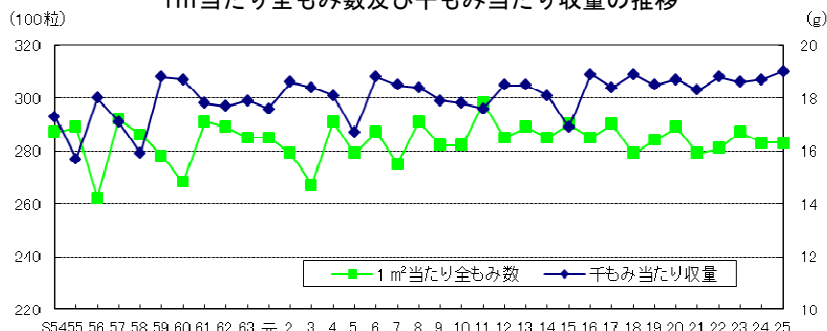
年次	全もみ数	登熟	被害	(作最 況終 指 数)
19	—	—	○	99
20	○	—	◎	102
21	×	×	×	97
22	—	—	○	100
23	—	—	○	101
24	—	—	○	100
25	—	○	○	102

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み
×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

平均気温(出穂前～登熟期)の推移



1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



4 収量水準の動向

収量水準の高い「あきさかり」の作付面積割合が増加していることから収量水準は上昇傾向にある。

長野県

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H21	22	23	24	25	26 (見込)
コシヒカリ	630	73.7	73.9	74.2	73.9	75.7	76.0
あきたこまち	617	15.0	14.1	13.8	15.2	13.8	13.0
キヌヒカリ	614	2.2	2.7	2.8	2.8	2.4	1.8
単収試算値の対前年差(kg)			0.0	0.1	-0.2	0.3	0.2

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成26年産見込は関係機関の情報から推計した。

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」及び「あきたこまち」を中心とした品種構成に大きな変化はない。

2 栽培技術等の動向

高温登熟障害（胴割米、白未熟米）回避のため、移植時期等を遅らせることや、規模拡大及び効率化の推進のため、疎植栽培等の低コスト稲作の指導が行われている。

なお、田植期を遅らせる傾向及び疎植栽培の推進により1㎡当たり株数を減らす傾向がみられる。

3 収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、千もみ当たり収量はおおむね安定しているものの、全もみ数が減少傾向となっている。

<最近の作柄（平成19年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
19	—	—	—	100
20	—	○	—	102
21	×	—	×	96
22	—	—	×	98
23	—	×	×	97
24	×	○	×	98
25	—	○	—	101

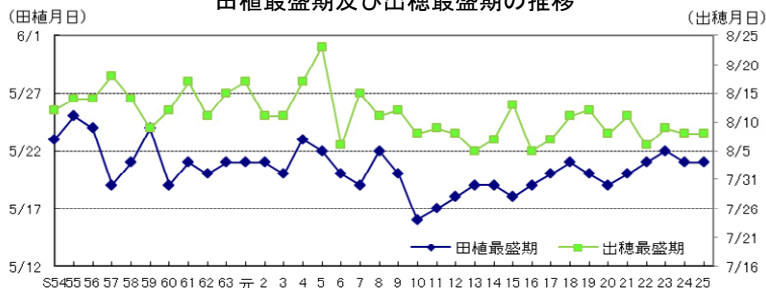
注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

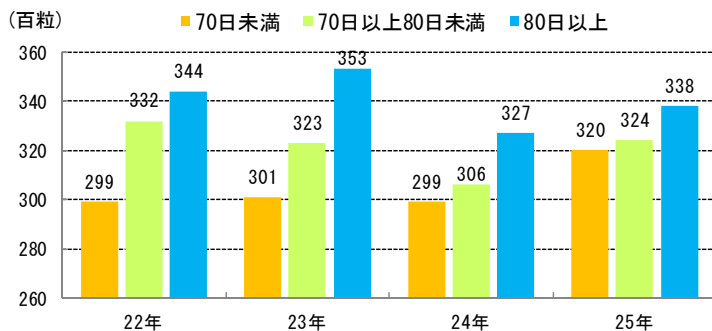
移植時期等を遅らせることによる出穂までの生育期間の短縮や、低コスト稲作のための疎植栽培によるもみ数への影響等により収量水準は低下傾向にある。

<栽培技術等の動向>

田植最盛期及び出穂最盛期の推移



田植日から出穂日の日数別1㎡当たり全もみ数

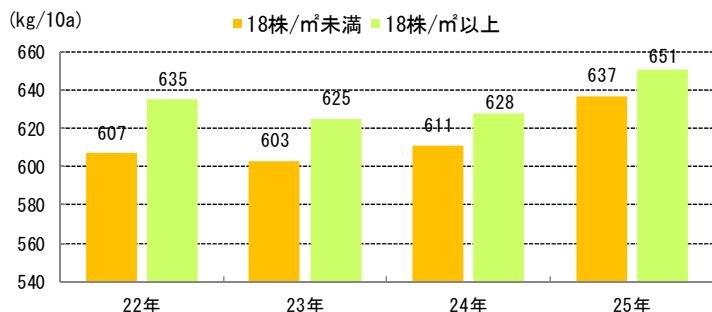


※ 水稻作況調査結果より作成した（以下同じ。）。

栽植密度別標本筆数割合の推移

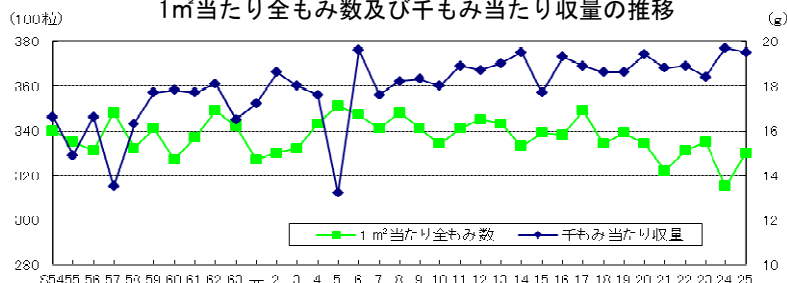
栽植密度	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別栽植密度別筆数割合 (%)					
		H20	21	22	23	24	25
18株/㎡未満	615	29.4	34.8	30.6	27.0	37.1	40.8
18株/㎡以上	635	70.6	65.2	69.4	73.0	62.9	59.2
単収試算値の対前年差(kg)			-1.1	0.8	0.7	-2.0	-0.7

栽植密度別10a当たり玄米重



<もみ数及び登熟の推移>

1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



佐 賀 県

1 品種構成の動向

「ヒヨクモチ」、「夢しずく」、「ヒノヒカリ」及び「さがびより」を中心とする品種構成となっているが、収量水準の高い「ヒヨクモチ」の作付割合が減少傾向にある。

2 栽培技術等の動向

高品質米生産及び低コスト等効率的な米づくりの推進のため、生育ステージに応じた施肥管理、水管理等の指導が行われている。

なお、省力化として基肥一発肥料の利用が中晩生品種で増加している。

また、稲後作の準備のため早期落水の傾向がみられる。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、出穂前後40日間の平均気温が上昇傾向となっている。

なお、収量構成要素をみると、ヒヨクモチの10a当たり玄米重が減少傾向となっている。

<最近の作柄（平成19年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指数）
19	—	×	×	95
20	×	—	—	98
21	×	○	—	100
22	×	×	×	94
23	—	—	—	101
24	×	—	×	97
25	—	×	×	93

注：○：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、○：少ない、○：やや少ない、—：平常並み
 ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「ヒヨクモチ」の作付面積割合が減少していることに加え、稲後作準備のための早期落水による登熟への影響や省力化のため利用が増えている基肥一発肥料の効果が気象条件で変化する影響により、収量水準は低下傾向にある。

<品種別作付面積割合の動向>

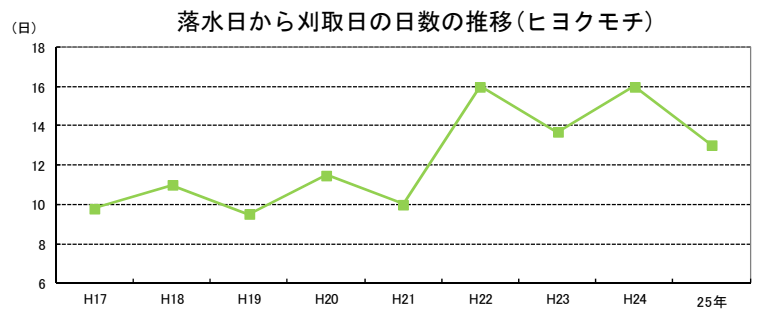
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H21	22	23	24	25	26 (見込)
ヒヨクモチ	560	24.2	24.7	25.0	24.6	23.3	21.5
夢しずく	486	23.4	22.9	23.0	22.0	23.1	23.3
ヒノヒカリ	501	20.4	19.8	20.3	20.5	20.0	20.5
さがびより	523	5.6	15.5	16.3	17.1	19.1	20.2
コシヒカリ	433	8.9	8.2	8.2	8.4	8.0	8.3
単収試算値の対前年差(kg)					0.0	-0.5	-1.2

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である。
 2. 平成26年産見込は県の品種別作付計画から推計した。

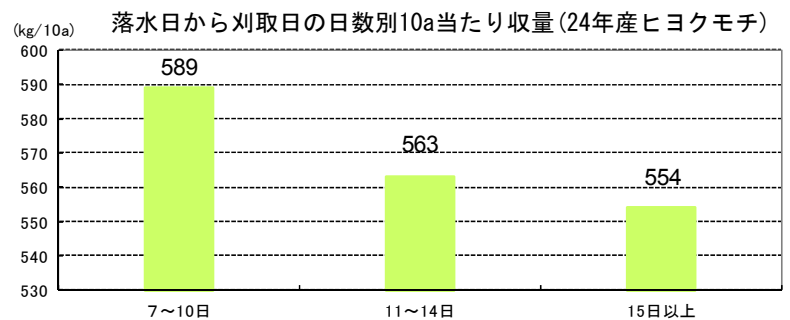
基肥一発肥料の利用割合

	H20	21	22	23	24	25
中生品種	33.6	35.0	37.5	40.6	39.2	45.9
晩生品種(ヒヨクモチ)	48.7	49.8	48.0	50.5	51.0	55.4

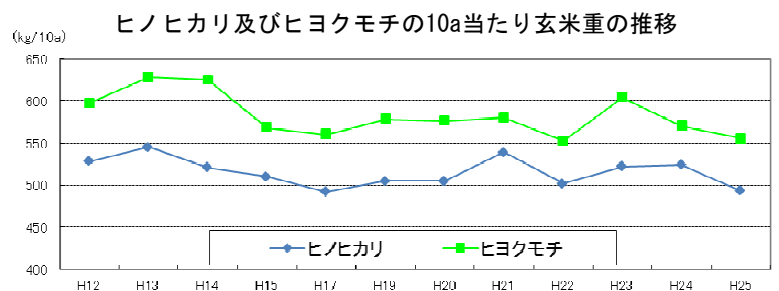
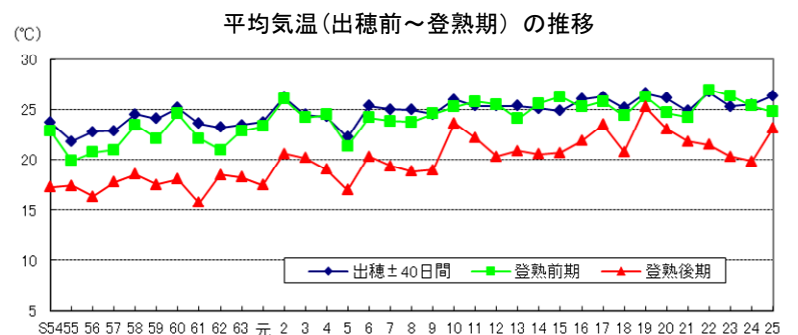
※ 1. 関係機関等の資料により推計した。
 2. 中生品種とはヒノヒカリ、たんぼの夢及び天使の詩である。



※ 水稲作況調査結果及び農家への聞き取りにより作成した。



<平均気温、10a当たり玄米重の推移>



※ 作況指数100から10ポイント以上差のある年次を除外している。